

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④

智慧、大海のごとし

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第108回から110回が東京国際フォーラム(有楽町)で行われ、108回では「正念・正観」等について、109回では「空・無相・無願三昧」等について、110回では「道の自然」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第106回から一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

覚さとるといことは迷いの事実を知ること

「智慧、^{だいかい}大海のごとし」(『真宗聖典』55頁、東本願寺出版、以下『聖典』)とありますが、親鸞聖人は、この智慧という言葉、仏の名号が智慧という意味をもつという使い方もされますけれども、「信心の智慧」(『聖典』503頁)という言い方もなさるのです。我々に起こる信心が智慧という意味をもつ。いずれにしても、仏教の智慧というのは、この世の智慧とは質が違う。この世の智慧は、処世の智慧とか人生の智慧とかいう言い方もありますが、この世を渡っていく方法論に関わる智慧なのでしょう。しかし、仏教の智慧はそうではなく、この世の迷いを^{めざし}翻すようなはたらきをもった智慧です。だから、英語で言うとknowledgeのごとき智慧ではなくて、wisdomという言葉、「^{えいち}叡知」というように翻訳されたりしますが、そういう言葉が仏教の智慧に当るのでしょう。

仏教の智慧は「^{ぼだい}菩提」とも言われる。覚りです。菩提とは目覚めですから、迷っている命から目覚めるといことは、迷いに気づくということなのです。

迷いに気づいて、迷っている事実をしっかりと見ることが成り立つのが、仏教の智慧である。迷っている事実を知ることと菩提とは別であるという考え方もあるのですけれど、曾我量深先生は、迷いの事実を知ることが覚るといことなのだ。覚るといことは、迷いの事実を知ること以外にないのだ。このようにおっしゃいました。

しかし、迷いの事実を本当に知ることは、凡夫にはできないのです。迷いの事実、と言葉では言うけれど、他人のことなら気がつくけれど、自分が迷っているとは思わないのです。だから凡夫は気がつかない。そこに仏陀の側から教えがきて、教えを通して、どこまでも我々は迷い続ける人間であると知らされていくことが、菩提を味わう道になるのです。

何かそういう話をすると、仏教はつまりプロセス、過程でしかないのか、究極がないのかと、そのように返されてしまうことがあるのですけれど、これがやっかいです。迷っているのだから、覚りが開ければ、もうそれで終わりだろうと、そのように単純に我々は考えたい。けれども、そのように考えて覚りを求めて、何か体験で一瞬でも覚りのようなことを感じ取って、それで死んでしまふなら別だけれど、それでもまだ生きている場合はどうなのだ。覚りのままに生きていく、何かそういうものがありそうだという思いは、苦しんでいる側からするとないわけではないのですけれど、これが覚りだというように気がついた人の自覚内容は、「ずっと迷っているのだな」と気がつくということなのでしょう。だから、無理をしたりしなくなるのでしょう。

■迷いの自覚とは気づかされて歩いていくこと

もう一回やり直すということを繰り返さざるをえないのは、迷っている証拠なのです。そこが難しいところで、「悟後の修行」という言葉が禅のほうにあるのです。悟ったから終わりということはないと。悟ったところにまだ修行がある。修行ということは、生きている事実には、乗り越えなければならぬ課題が常に与えられてくるということです。

ですから、迷いの自覚ということとは、単なる過程ではなくて、気がつかされて歩いていくということです。だから不思議です。「菩提」は「道」とも翻訳する。道というのは、言うならば過程です。それが同時に覚りという意味をもつ。だから、覚って終わりというのではなくて、覚りから始まる。他力の信心の場合も、信心から始まる。信心で終わるのではない。そういうことが、曾我先生が言われた「仏教には入門はあるけれど、卒業はないのだ」ということだと思のです。卒業はないというのは、どういうことだと。迷っている側からすると意味がわかりませんが、信心に触れてみると、本願力のはたらきをいただくことと、我々が煩惱の生活をしていくこととは、矛盾しながら重なっている。歩いていくというと、過程みたいですが、念々に出遇いつつ生きていくということなのです。出遇った、それでお終いではない。出遇ったところから出発して、出遇いつつ生きていく。そういうあり方を、智慧という言葉で教えてくださるのだらうと思のです。信心の智慧という言葉で。

それは、「智慧、大海のごとし」。つまり、如来の智慧が開く世界は大海のごとくである。如来の智慧、これは我々が尋ねようとしても、我々の分限からは尋ねることができないほど大きな智慧であると。大悲が智慧という意味をもつ。つまり、光は智慧の相だと言われている、阿弥陀の光は尽十方無碍光、あらゆる世界を無碍に照らすのだと。「廣大無辺際」とも言われますけれども、そういう世界を如来の智慧はもっていると言うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2018年2月～2018年4月) 一抄一

■2018年

- 2/8 第13回研究員と読む公開講座「永遠のいのちから広がる浄土—『法華経』を読む—」担当：戸次研究員
①2/8 ②2/15 ③2/22 ④3/1
- 2/9 ご命日のつどい
- 2/9 第109回(通算第160回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 2/20 第209回英訳『教行信証』研究会
- 2/21 第9回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 2/26 第185回清沢満之研究会
- 2/27 第22回「『教行信証』と善導」研究会「『愚禿鈔』における『観経疏』三心釈の推究」大谷大学講師：藤元雅文氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 3/9 ご命日のつどい
- 3/9 第110回(通算第161回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 3/12 第210回英訳『教行信証』研究会
- 3/13 第186回清沢満之研究会
- 3/15 第10回「三宝としてのサンガ論」研究会「仏教サンガとはなにか」花園大学文学部教授：佐々木閑氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 3/26 第23回「『教行信証』と善導」研究会
- 3/27 第4回清沢満之研究交流会(精神主義とその時代)〈研究発表〉「哲学者・清沢満之と「精神主義」という経験——近年の研究動向をふまえてつづ」真宗大谷派教学研究員：名和達宣氏、「高山樗牛・姉崎正治の〈憧憬〉と宗教意識——清沢満之「精神主義」との比較を通じて」国会図書館司書：長尾宗典氏、「明治宗教学における「立脚地」探求の諸相——清沢満之、綱島梁川、西田幾多郎」日独文化研究所事務局長：水野友晴氏、〈コメンテーター〉大谷大学文学部教授：福島栄寿氏、〈司会〉親鸞仏教センター研究員：長谷川琢哉(文京区・求道会館)
- 4/3 第1回(通算49回)『尊号真像銘文』研究会
- 4/4 第6回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会
- 4/13 ご命日のつどい
- 4/16 第11回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 4/20 第211回英訳『教行信証』研究会
- 4/23 第187回清沢満之研究会
- 4/24 第24回「『教行信証』と善導」研究会
- 4/25 第15回親鸞仏教センターのつどい(記念講演)「イスラームは、なぜ誤解されるのか？」同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授：内藤正典氏、「他宗教との対話の方向性」親鸞仏教センター所長：本多弘之(千代田区・学士会館)

掲載論文

- 3月 『井上円了センター年報』vol.26
長谷川研究員「井上円了における『仏教』・『宗教』・『道徳』・『哲学』—明治中期の道徳教育をめぐる論争を背景として—」
『宗教哲学研究』第35号
長谷川研究員「(書評)高田信良『宗教としての仏教』」